

石碑について

現在本校の敷地内には3つの石碑があります。いずれも本校が現在の尾崎小学校の敷地にあった時期に建立され、現校舎の完成に伴い現在の場所に移築されたものです。

「栄光碑」

現在の1つ前の校舎は、秋田県初の鉄筋コンクリート製の校舎として建設され、創立60周年にあたる昭和37年に完成しました。その後の環境整備の過程で建立されたのが、現在前庭にある「栄光碑」です。この石碑の建立に取り組まれたのは、昭和38年4月に着任した第21代校長の佐々木真綱先生です。佐々木校長先生は、同年9月に欧米教育事情視察団に参加され、帰国後に次々と本格的な環境整備計画を打ち出し、その実現に取り組まれました。

「(前略) イギリスのある私立高校を視察していたときのことである。(中略) 芝生を敷きつめた広大なキャンパスの小高い丘の上に講堂がある。その入口には大理石の碑が、あたりを見下すように建っていた。その碑の文字は幾星霜もの風雪に堪えてきたのであろう。判然とはわからないが、よく見ると『グロリー(栄光)』と刻まれていた。何の栄光かと後を見ると、その学校の文化、スポーツ両部の輝かしい栄光の歴史が記録されているではないか。(後略)」(定時制生徒会誌「僚星」より)

この経験がきっかけとなり、帰国後に構想を練られたとのこと。石は、当時の本校教職員によって探し出されました。

「遠く小砂川周辺まで赴き、炎天のもと丈余の雑草をかきわけ、腰を没する泥水を徒渉して、探索した結果、ようやくにして、その色、その形、その大きさともに、ほぼ理想に近い巨石を探し出したのであった。」(「本荘高校八十年史」より)

文字の揮毫は、元東京大学総長の南原繁先生に依頼されました。佐々木校長先生が南原先生を直接訪問し、趣旨を説明して揮毫を依頼したとのこと。南原先生は香川県出身の政治学者で、戦後最初の東京大学総長を務められました。戦後、新しい学校制度(現在の小学校6年、中学校3年、高校3年、大学4年)を作る際に中心になったのが、この南原先生です。東大総長を退任されてから、全国各地からの依頼に応じて講演を行う中で、この本荘にも数回足を運ばれています。ちなみに由利高校の校訓「真実為原」の書も南原先生によって書かれ、昭和29年に完成した大体育館に掲げられました。南原先生とこの本荘には結構深い縁があります。

栄光碑の除幕式は、昭和40年10月に、全校生徒、職員が参列して盛大に挙行されました。「八十年史」に掲載されている当時の写真を見ると、現在栄光碑の前にある、各部の全国大会優勝の記録を刻んだプレートはまだありません。プレートには「贈 平成二年三月卒業生一同」と刻まれており、現校舎に移転後に設置されたものです。昭和・平成・令和と途切れること無く記録が続いているのを見ると、本荘高校の伝統の力のようなものを改めて感じます。「右文尚武」の校標の下で、この後に続く記録を今後も重ねていってくれることを願っております。

「真綱碑」

校門を入れてすぐ右手、弓道場の前に、一見庭石のように見える大きな石がありますが、よく見ると次のような言葉が刻んであります。

「明日を 決定する為に 今日 最善をつくせ」

この石碑は「八十年史」の中では「真綱碑」と呼ばれています。建立された経緯については、残念ながら「八十年史」「百年史」に記載はありません。名称は、佐々木真綱校長先生の名前に由来しているのではないかと個人的には考えています。刻まれている言葉も佐々木校長先生によるものかもしれません。

「本荘高校生徒たることを自覚し、切磋琢磨し学業やスポーツに精励し校風の発揚、人格の完成に悔いなき青春を過ごすことを切望したのが（中略）真綱碑の意味であったろう」（「本荘高校八十年史」より）

前校舎においては栄光碑の脇に設置されていたとのこと。「栄光碑」と並べることによってより深い意味合いを持つ存在だと思しますので、現在離れた場所に設置してあるのが少々残念です。

「玲瓏同氣の碑」

現在、旧校門と共に中庭に設置されている「玲瓏同氣の碑」は、本校創立50周年記念事業の一環として建立されました。この記念碑の建立の由来について、当時の同窓会長である須藤直吉氏が学校新聞「玲瓏」第27号（昭和27年）に書かれた文章が「八十年史」「百年史」に掲載されており、その中に次の一節があります。

「今回本荘高等学校創立五十周年に当り、記念祝賀協賛会は戦後解体されていた忠魂碑の資材を活用し、記念事業の一つとして新たに記念碑を建設しこれを『玲瓏同氣碑』とした。敗戦により占領下校庭に存置することを許されず解体された忠魂碑は昭和十四年七月に建設除幕されたものであるが、それは支那事変に於て戦没された今野忠七先生に対する同窓生一同の思慕の結晶であったと同時に、爾来今次大戦中若き生命を国家に捧げた幾多戦没同窓の霊が懐かしい母校を訪ねて校庭に憩う場でもあったのである。（中略）

中秋十月十日の今回の記念式典に於ても、亦これらの物故者の霊を新設記念の場に迎えて慰霊し、且つ共に母校現在の隆昌を祝福し、更に職員・同窓生・在校生が一体協力し今後の躍進への努力を誓わんとするのであるが、玲瓏雪華校章に象徴されている伝統の魂に生きた物故者の霊も、恐らくはこれを期待しつつ激励してくれることと思うのである。かくして母校の永遠の躍進と隆昌は、融合一如『玲瓏同氣』の力が脈々と発し、生々として躍動するところに確保されることを信ずるのである。（後略）」

ちなみに、現在「玲瓏同氣の碑」と共に中庭にある旧校門は、創立65周年記念事業の一環として修復されたものです。創立60周年の年に前校舎が新築された際に、赤煉瓦の校門も近代的なものに代えようという話も出ていましたが、当時の鎌田宏教頭先生が「校門を歴史の象徴にしたらどうか」と提案し、修復事業に繋がったとのこと。なお、校名標の文字は、須藤直吉同窓会長の筆によるものです。

（文責：校長 熊澤耕生）